

一人の確かな国語力をとらえる評価の設定(1)

「おおむね満足できる状況」を理解する

— 二学年構成から見た関心・意欲・態度の評価 —

青山学院大学 岩崎 保

初めに

平成十七年度版「年間指導計画資料」の作成に当たっては、合わせて、「評価計画の策定」を試みた。その範囲は、国語学習の入門期である一年生から六年生の最終単元までの小教材を含めてすべての単元に及ぶ。その詳細についてここで触れることは本稿の目的ではないので控えるが、前記資料を参照していただきたい。

さて、学習指導要領の指導事項は、二年間にわたって達成するように示されている。したがって、下の学年は基本的理解度をとらえ、上の学年は基礎としての定着と活用を中心に評価することが望まれる。先の資料では、その性質上の点について取り立てた扱いをしていないが、評価計画を作成するに当たってはぜひ留意していきたい事柄である。

そこで、今回から三回に分けて、「関心・意欲・態度」、「話すこと・聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」、「言語

についての知識・理解・技能」の五つの観点について、二学年構成から見た評価の内容を考えていきたい。第一回目である本稿では、「関心・意欲・態度」の評価について、いくつかの評価例を示しながらその考え方について取り上げた。続く二回では、『読むこと』の評価について、『話すこと・聞くこと』の評価について、『書くこと』の評価についてを取り上げていきたいと考えている。

一 「関心・意欲・態度」の評価について

この観点は、児童が国語学習やその内容に関心を持ち、積極的に学習する姿を見るものである。指導事項に示されないこの評価は、国語学習を支える児童の活力ある姿を見るために設定している。比較的新しいもので教師の経験も浅く、子どもの姿をとらえるのが難しいが、この結果は学習全般に影響を及ぼすものであるので、しっかりと見取っていきたい。

「関心」は学習展開の導入で、「意欲」は学習展開のなかで、「態度」は学習末で、活用・発展の姿もとらえて行われることが多いが、これにとらわれることなく、学習全体のなかでの子どもの姿を見ていきたい。

(1) 一年生の「関心・意欲・態度」の評価例

初めて国語教科書を手に学習を始める一年生は、教科書を使って学習する方法を身につけることが大切で、それに向けた評価が望ましい。

一年は国語学習の入門期であるので、少し丁寧に評価例を示した。

「はる」(四月)「春を話す態度」の評価例

【関】教師の指示を聞いて楽しく活動し、挿絵を見てわかったことを話そうとしている。

挿絵を見ながら、思いついたことを先生や友達の前で進んでお話ししようとする態度がねらいであり、楽しいと言える学習への参加のしかたの評価である。

「どうぞ よろしく」(四月)「平仮名を書く意欲」の評価例

【関】平仮名を丁寧に書くようになっている。

初めて文字を書き、対話を通して友達と仲良く交流する教材である。

平仮名で初めて「い・ち・ね・ん」と自分の名前が書け

る意欲の評価であるが、「相手によくわかるように丁寧に書くことがねらいで、個別指導が必要となる」。

「はなの みち」(五月)「文と絵を読む関心」の評価例
【関】登場人物の行動や時間・季節の移り変わりについて気づいたことを話したり、文と絵のかかわりを考えたりしようとしている。

お話の季節の移り変わりがあら筋や挿絵とかわっているおもしろさに気づいて、音読し想像して楽しさを広げる初めての物語である。

楽しみ方や想像のしかたは個性だが、想像する学習への関心から読解力の感性をとらえることができると思つ

「くらべて よもつ／じどう車くらべ」(十月)「読書意欲」の評価例

【関】自動車の「はたらき」と「つくり」の關係に興味をもち、図鑑を作るために、自動車についての絵本や図鑑を読もうとしている。

自動車の「はたらき」と「つくり」には関係があることがわかる、いくつかの例を比べ、重ねて読むことでより深く納得できるという極めて知的な活動である。

好きな自動車の「はたらき」と「つくり」のカードを一人で作るために、絵本や図鑑を読書する意欲を見ている。

「こえに だして よもつ／くじらぐも」(十月)
「想像を楽しむ態度」の評価例

【関】想像を広げて話を楽しんでいる。
自分たちの学校生活を連想して楽しむ態度を見ている。雲に乗る夢を音読と合わせて動作化によって表現する姿である。

「よく 見て かこう／しらせたいな、見せたいな」
(十一月)「見つけて書く意欲」の評価例

【関】好きな動物や植物を見つけて、家の人や友達に書いて知らせようとしている。

題材を探す様子、カードに見つけたことを書く様子、文章を書く様子の全体に意欲が表れている。

「おはなしを たのしもつ／たぬきの 糸車」(三月)
「音読を楽しむ態度」の評価例

【関】友達と絵や言葉について工夫することを話し合い、楽しんで音読しようとしている。

工夫した音読を実践する態度に注目している。
(2)二年生の「関心・意欲・態度」の評価例

低学年の指導事項も二年間で習得することを考えて、学習活動の積極的な「態度」の成長を見るようにしたい。

「一 みんなで よもつ／ふきのとう」(四月)「音読を楽しむ態度」の評価例

第一学年、第二学年の配当漢字について、いろいろな読み方があることを知る小教材である。違う読み方を文を作って確かめようとする意欲を見ている。

「六 お話を楽しもう／スーホの白い馬」(三月)
「好きな本を伝える意欲」の評価例

【関】「スーホの白い馬」を想像を広げながら読み、二年生で自分が読んでおもしろかったお話を友達に伝えようとしている。

一年と同じ単元名のもと、物語を読む楽しさを友達と共有し、「読書意欲」を共通の評価としている。

(3)中学年の「関心・意欲・態度」の評価例

中学年では、導入単元と言葉単元、及び言語事項のなかの漢字について評価例を示し、二年間の指導事項の習得を見つめ、比べてみる。

「導入単元」(四月)で「読む意欲と態度」の評価例

【関】写真を見て、想像しようしたり、場面の様子を音読に表そうとしている。

三年 「一 本と出会う、友だちと出会う／きつつきの商売」では、写真のイメージを「きつつき」の優しさに重ねて理解し、場面の様子を音読で表そうとする意欲と実践を見ている。

【関】身近なところで見つけた春を友達と話そうとするとともに、楽しみながら音読しようとしている。

一年生より視野の広がった春を話すこと、竹やぶの春の音読を楽しむ「態度」を見ている。楽しむために自分なりの音読の工夫に期待を込めている。

「三 書いて 知らせよう／かんざつ名人になろう」
(五月)「書いて伝える意欲」の評価例

【関】身近なものに関心をもち、動きや様子を生き生きと伝えようとしている。

身近な植物を観察し、おもしろさを見つけ、記録して伝える喜びの意欲を確かめている。

「五 友だちに分かるように 話そう／あったらいいな、こんなもの」(九月)「話す・聞く意欲」の評価例

【関】自分で考えたものについて、相手にわかるように話したり、友達とやりとりしようとしている。

「ドラえもん」にあやかって「あったらいいな」と思うものを想像し、友達に考えたことをわかりやすく説明する意欲を見ている。

「かん字の読み方」(十一月)「漢字を使って文を作る意欲」の評価例

【関】いろいろな読み方をする漢字について、読み方を確かめたり文作りをしたりしようとしている。

【関】自分の体験を重ね合わせて文章を読もうとしている。

「一 一 本と出会う、友だちと出会う／三つのお願い・手紙を書く」では、同じ「場面の様子を想像し」でも、自分自身の友達との喧嘩の体験を思い起こすことで、想像しながら読む実践の態度を評価している。

どちらも本との出会いから始まるが、想像する気持ちは、友達への心として四年生に深まりをもたせている。

また、いずれも学年の導入単元である。巻頭「つづけてみよう」で日記やスピーチに取り組み意欲とも合わせて、新しい友達とかわり合いながら学習していこうとする国語学習への取り組みの姿勢を見たい。

「言葉単元」(二月)で「言葉への関心と意欲」の評価例

【関】漢字の成り立ちを知り、興味をもっていろいろな遊び方に挑戦して楽しんでいる。

三年 「四 言葉って、おもしろいな／漢字と友だち」では、漢字の成り立ちに関する興味や関心を見た。

【関】「教科書を読んで言葉あそびのおもしろさを知り、本を探したり、言葉遊びを作ったりしようとしている。」

「四 言葉って、おもしろいな／言葉遊びの世界」は、言葉の楽しさやおもしろさへの興味・関心を見た。

同じ単元名のもと、どちらも言葉のおもしろさに関心をもち、言葉で楽しもうとする態度を評価する。

前学年の漢字への「関心・意欲・態度」の評価例 今回の教科書では、二年生以上に年間六か所の「漢字の広場」を位置づけている。内容は、前の学年で学習した漢字を定着させるもので、絵に示されたことを「お話づくり」や「様子の説明」などを目的に文章化することで漢字の習得を図るようになっている。

【関】絵に出てくる場面の出来事や順序について、教科書中の言葉を見ながら考えようとしている。

「漢字の広場」(五月)は「漢字への関心」を評価した。

【関】絵に描かれた町や人々の様子を見つけ、文章に表すことを考えている。

「漢字の広場」は「漢字を活用する態度」を見た。それぞれの学年発達に即して学習法を工夫している。

(4) 高学年の「関心・意欲・態度」の評価例

高学年では、読書単元と学年最後の「学習したことを生かして」について評価例を示し、二年間の指導事項の習得を見つめ、比べてみる。

「読書単元」(七月)で「読書への関心と、読書の楽しさを友達と共有しようとする意欲」の評価例

【関】読書会に向けて本を読んだり、友達の発表を聞いて考えを深めようとしていたりしている。

「四 読書の世界を広げよう／千年の釘にいどむ／本は友達」では、読書発表会に参加する意欲を見ている。

【関】どういった本を読みたいか、自分なりに考えようとしていたり、友達の要望に積極的にこたえようとしていたりしている。

「四 読書の世界を深めよう／森へ／本は友達」は、友達への紹介を工夫する「意欲」と、友達の要望にこたえる「態度」についてとらえようとしている。また、本の選定についても、なんでもいいのではなく、自分なりの考えがもてることが期待されている。

単元名でも示しているように、五年では広げる読書、六年では深める読書を目ざしている。その深まりを見るようにしたい。

国語科の総合的学習として位置づけた学年最後の「学習したことを生かして」(三月)での「関心・意欲・態度」の評価例

一年の締めくくりとして、「ここまでの学習成果を」自分の力で活用して実践する態度」を評価している。

【関】自分の学習課題を作り、発表会で発表する意欲をもち、そのために物語を読み深めたり資料を選んで読んだりして活動している。

「大造じいさんとガン」は、学習課題に沿って発表する「意欲」をもって、「主体的に読書活動を進めている態度」を見ることにある。

【関】六年間で身につけた国語の力を使い、自分の力で六年生の最後にふさわしい学習をしようとしている。

「海の命／今、君たちに伝えたいこと／生きる」は、六年間の集大成としての国語力を生かした思考力、想像力、実行力を自覚することを求めて、「納得のいく学習を目ざす態度」を見ようとしている。

果たして、児童は期待した成長を遂げ、「おおむね満足できる状況」に達したといえるのだろうか。国語力に自信をもち、自分の発想を膨らませて学習する意識として、「関心・意欲・態度」を掘り起こすことが現代教育の急務と考えての企画である。

個々の学級で教師が児童を見る確かな理解から、児童の学習力の改善と進歩と定着へ温かい支援の実践に期待している。